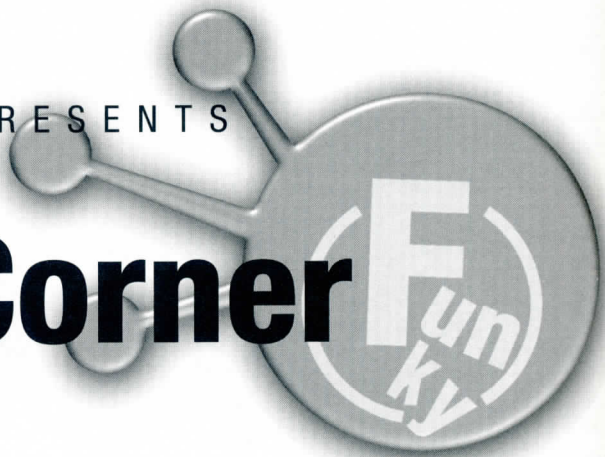


TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

Funky Corner



文・撮影●波多利朗 text and photo by Hata Toshiro
 (URL) <http://www.funkygoods.com/>
 (E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp

謎ば〜界の変態マシン LC-8620

🌀 これでもポータブル？ 太古のXT互換機「MUGEN」

毎回本題とは全く関係の無いことを書いているこの「前フリ」コーナーであるが、今回は珍しくパソコンについて書いてみようと思う。モバイルプレス誌は携帯型コンピュータの雑誌だから、この内容ならば、あまりハズしてはいないだろう、たぶん。

さて、今回の話題はオークションで落札した太古のポータブルパソコンについてである。ポータブルと書いたが、これをポータブルと呼ぶには抵抗を感じるほど大きくかつ重い。品名は、Microvoice Corporationという会社から発売されていた「MUGEN（無限）」というマシンだ（写真A）。

このマシン、NECのPC-9801シリーズがこれから全盛期を迎えようとしていた1984～85年頃に発売されたPC/XT互換機である。1984年といえば、PC-9801M2や現在カルトマシンとしてオークションで人気の高いPC-100が、また1985年にはV30搭載の名機PC-9801VMがデビューした年である。

MUGENはCPUにV20（ μ PD70108D-8：8MHz）を使用し、5インチ2Dドライブ（360Kバイト）を2基搭載、さらに8インチ程度のCGAグリーンモニタを本体に内蔵している。外形寸法は43（W）×41（H）×23（D）cmと、モニターケースほどの大きさだ！ ちなみに重さもモニタータイプのAT互換機とほぼ同じくらい。こん

なに重くてかさばるマシン、よく持ち運びしたものだと感じてしまうが、当時としては画期的だったのであろう。まあ、ケース上面には取っ手（！）も付いているので、その辺は良く出来ているとは言えるが……。

さらに、マシンのデザインがこれまた強烈だ。マシン前面のカバーはキーボードとなっており、使用しない時はフタの役目を果たす。マシン背面には、ちょうど「おかもち」のようなスライド式のカバーが取りつけられており、これを引き上げるとラーメンならぬ拡張スロットと電源部分が現れる。電源の横には、ちゃんと電源コードを入れる窪みまで付いているという芸の細かさ。マシン正面は、一番下にグリーンモニタ、その上に縦に（！）5インチFDDを配置するというとんでもない工業デザイン。さらに前面プラスチックの色は、まるで中小企業の応接間に置かれているソファーのようなこげ茶色ときているので、その「ダサ」さたるや半端ぢゃない（写真B）。

外観は変な格好をしているMUGENであるが、マザーボードを見るとやはりXT互換機であることを実感できる。6本あるXTバスのうち3本は、CGAビデオカードとパラレルI/Fカード、FDDカードで占有されており、残り3本は空きスロットとなっている。奥にはCPUとコプロのソケットが配置され、8088では無く、互換CPUであるV20が実装されている（写真C、D）。

このマシン、妙な格好をしてはいるものの、CGAディスプレイを持つ立派なXT互換機である。となれば、数々の謎ば〜機と同様に日本語化も可能なはずだ。しかし、360KバイトのFDD2基だけでは、とてもじゃないがOSも



写真A ポータブルタイプのPC/XT互換機、MUGENの外観

ミニタワーケースほどもあるポータブルPC/XT互換機MUGEN（無限）の外観。でかい！でかすぎる！でも取っ手付きなのでとってても便利（ってサブイチャレ言ってるバアイぢゃないな……）

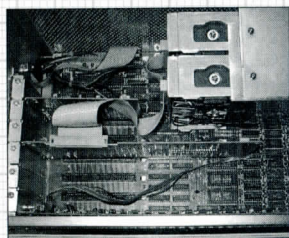


写真B MUGENの背面

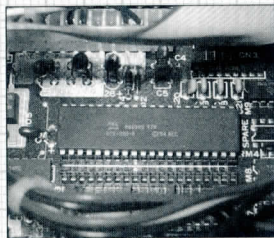
ケース背面には拡張スロットと電源がある。なお、電源横の窪みは電源コードを格納するためのもの。背面は出前持ちのようなスライド式のカバーが備わる



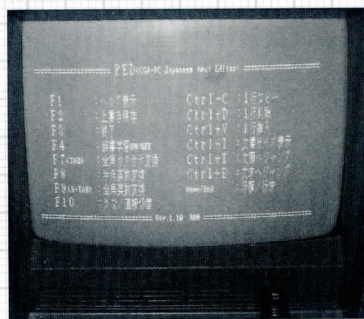
MUGEN



写真C MUGENのマザーボード
外観はかなり特殊であるが、マザーボードを見ると見慣れた(?) XTバススロットが現れ、XT互換機であることを感じさせる



写真D MUGENで使用されているCPU
MUGENではIntelの8088CPUでは無くNECのV20 (μPD70108D-8 : 8MHz) が使用されている



写真E MUGEN上で動かした日本語エディタPED
基本的にPC/XT互換機であるのでDOS/C化も可能だが、今回は簡易日本語エディタPEDを使用して日本語を表示させてみた

含めてDOS/C化に必要となるファイルを格納するだけのディスクスペースを確保することができない*1。というわけで、とりえず簡易日本語エディタPEDのミニマム版を用いて、日本語を表示してみたのがこの写真である(写真E)。

さて、この「MUGEN」もかなり変態チックなマシンであるが、今回ご紹介する謎ば〜機、LexicompのLC-8620も、それに劣らずユニークな仕様を持ち合わせた極めてカルトなマシンなのである。

*1 MUGENのマシン本体内部には、空きのXTバススロットがあるため、ここに拡張カードを入れてIDEのHDDを内蔵することも可能である。ここで、「IDEのI/Fカードは基本的に16ビットのATバス (ISAバス) のものしか無いのでは？」と思われる方も多と思う。ところが8ビットのXTバスでも使用できるIDEカードも、極めて稀ながら存在していた (今はもう無いと思うけど)。コイツを使えば、マシン本体内部にHDDを増設することさえ可能なのだ。以上、長すぎる余談でした。

謎ば〜機界の異端児 LC-8620

今回ご紹介する謎ば〜機は、良く言えばユニーク、悪く言えば極めて変態チックなマシン、台湾はLexicomp製のLC-8620である (001)。

謎ば〜機の常で本マシンが市場に登場した正確な年代は不明であるが、おそらく1994年頃だと思われる。筆者は、1994年の秋にラスベガスで開催されたCOMDEX Fall (それにしても、あの頃のCOMDEXは、アヤシイもののオンパレードで面白かったなあ……) のサンズ会場内に設けられたLexicompのブースで、LC-8620に韓国版や中文版Windows 3.1を搭載したデモンストレーションを見学し、痛く感動した記憶がある。このマシン、今は亡き廃人御用達雑誌「PCWAVE」1994年12月号の傑作特集



LC-8620の外観
謎ば~界の異端児、台湾Lexicomp製LC-8620の外観。ちょっと厚めのパームトップ機といったところだ

「謎のパームトップ機日本語化計画」にも登場しているし、同誌の翌月号では日本語化についての詳細なレポートも掲載されていた。日本では秋葉原の某ショップが代理店となり、MovingPocketというブランド名で販売していたこともあったので、ご覧になった方も多いであろう(002)。

さて、今回記事を書くにあたって資料整理をしていたところ、発売当時の製品カタログが出てきたのでご紹介しておく。カタログはLC-8620本体とほぼ同じ大きさの冊子となっており、ページをめくるとLCD画面とキーボードの写真が実寸で印刷されているという洒落たものだ。このカタログを見て思い浮かべるのは、かの謎ば~機の傑作であるTidalwave「ME-386」のカタログであろう(因みにここでME-386のカタログを思い浮かべた方は、かなり廃人なので自覚するように!)。どっちがパクったのかは

わからないが、マシン本体の大きさを直感的に把握するには効果的な方法だ。おまけに、このカタログには内部基板の写真も掲載されており、全バラしなくてもマシンに使用しているデバイスを知ることができるというスグレモノ。HDD搭載が最大の特徴となっているだけあり、内部基板写真でもHDD部分には特別にマーキングが入っている(003)。

このようにLC-8620は、かなり濃ゆ濃ゆ謎ば~機であり、発売当時から話題性は十分であった。その理由として、やはりこのマシンのユニークなアーキテクチャーに依るところが大きい。

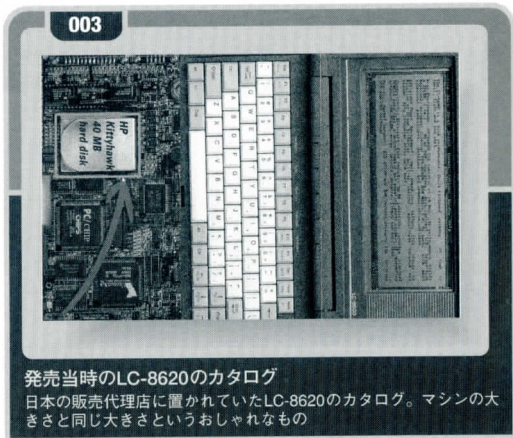
🔧 LC-8620の特徴

さて、そのユニークなアーキテクチャーであるが、まず最初に搭載CPUがあげられる。今までご紹介した謎ば~機には、8086や8088といったIntel製CPUを使用したものばかりだった。ところが、このLC-8620には、Chips & Technology製の16ビットCPUであるF8680A(7/14MHz)が使用されている。初期型のマシンでは、F8680を使用していたそうであるが、その後F8680Aに変更になったようだ。この石、Intelの8086互換CPUであるが、処理速度的には80286相当の実力を持っているというスグレモノ。反面、このCPUを使ったおかげで、日本語化に際しては、廃人たちの多大な努力が必要となってしまった。

2番目の特徴は、パームトップ本体にHDDを内蔵していることである。小さな筐体の中には、HP製の1.3インチHDD、Kittyhawk(キティーホーク)が内蔵されているのだ。HDDの容量は40Mバイト。たかだか40Mバイト



1994年のコムデックスのLexicompブース
LC-8620に中文版と韓国版Windows3.1をインストールしてデモしていた1994年のCOMDEX Fall会場写真。あの頃はDOS/Vも面白かったねえ……



発売当時のLC-8620のカタログ
日本の販売代理店に置かれていたLC-8620のカタログ。マシンの大きさと同じ大きさというおしゃれなもの

と笑うことなかれ！ LC-8620が発売された1994年当時では、5MバイトのPCMCIAフラッシュメモリーカードでも、びっくりするくらい高価なものだったのだ。世のbaumトップ機のほとんどが、フラッシュメモリーカードの導入無しでは満足に使用することができなかった中において、40Mバイトもの容量のHDDを内蔵していることは、ユーザにとって大きな魅力であった。

このようにLC-8620は、1994年当時のbaumトップ界においてはかなり豪勢で「変」な仕様となっており、baumトップ廃人たちの触手を動かすには必要にして十分であった。何と云っても、Lexicompという会社名からしてが、いかにも謎っぽくて怪しい！ 因みに同社のホームページであるが、検索をかけてみたら、下記のURLが出現した。

<http://www.lexicomp.com.tw/> (004)

ところで、日本にはあまり入荷していないと思われるが、LC-8620からHDDを省いたモデルであるLC-8600という廉価版も存在した。筐体は各モデルで共通化しているらしく、筆者が所有しているHDD搭載のLC-8620でも、ケース上の表記はLC-8600となっている。

🌀 LC-8620の製品概要

仕様面ではとってもユニークなLC-8620であるが、外観はごくごく一般的なbaumトップパソコンである。外形寸法は231×122×36mmで、プロポーション的にはTidalwaveの謎ば〜機、ME-386とほぼ同等だ。しかしHDDを内蔵しているため、かなり厚みがある。重量は電池込みで765g。筆者にとっては、毎日持ち運ぶには少々



台湾Lexicompのものと思われるホームページ
Lexicompで検索をかけたら出てきたホームページ

辛い重さだ。キーボードはキーピッチが14mmほどあり、タッチタイプ可能である。キーを押し込んだ時に「コック」という感触があるため、ミスタッチは起こりにくいほうだ (005)。

この手のマシンの場合、一般的には本体両サイドにPCカードスロットを搭載しているタイプが多いのだが、LC-8620の場合は本体内部にHDDを内蔵しているということもあり、PCカードスロットは向かって右側サイドに1基しか搭載されていない。向かって左側サイドには、通常のAT互換機に用いられているシリアルコネクタ及びパラレルコネクタが、カバーに覆われて搭載されている。I/Oコネクタに標準コネクタを搭載しているので、専用ケーブルが不要になり、この点は使いやすい (006)。

バッテリー関連についても、このマシンは実にユニー



005
キーボードアップ

LC-8620のキーボード。キーピッチが14mm程度確保されており、タッチタイプが可能である

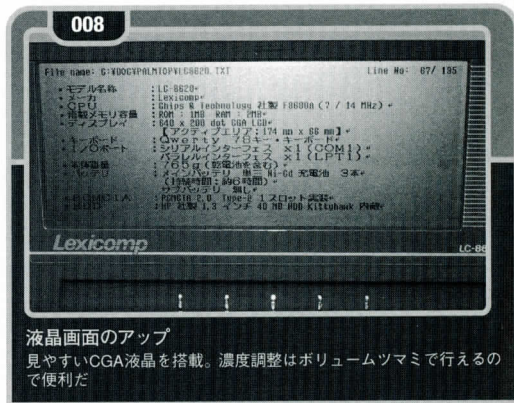


006
I/Oコネクタのアップ

LC-8620本体左側に配置されたI/Oコネクタ。シリアルとパラレルが標準コネクタで実装されており、使いやすい



バッテリーケースとバッテリーのアップ
 メインバッテリーにはNi-Cd充電電池を使用する。この辺も実にユニークな設計だ



液晶画面のアップ
 見やすいCGA液晶を搭載。濃度調整はボリュームツマミで行えるので便利だ

くだ。バッテリーはメインのみでサブバッテリーは内蔵していない。それでは電池交換時の内蔵メモリのデータバックアップはどうするのかというと、本体内部のスーパーキャパシタが保持する仕組みとなっている。メインバッテリーは通常のアルカリ乾電池は使用せず、単三型のNi-Cd充電電池を3本使用する。マシン本体に充電装置が組み込まれているため、充電は本体に充電電池を入れたままACアダプタを接続すれば良い。なお、充電量が充分でないと、ACアダプタを接続した状態でも起動できないことがある。こういった点も他のマシンとはかなり異なっている (007)。

余談だが、筆者がLC-8620を購入した当時、さっそく充電しようと思い本体にACアダプタを接続したところ、いきなりACアダプタが煙を吹き、メチャク驚いた経験がある。初期不良ということで販売店で交換してもらったものの、それ以来このマシンの電源関連については、あまり良い印象を持っていない。それもまあ、今となっては楽しい思い出だけどね…。

●LC-8620の製品仕様

モデル名称	LC-8620
メーカー	Lexicom
CPU	Chips & Technology製F8680A (7/14MHz)
搭載メモリ容量	ROM : 1Mバイト、RAM : 2Mバイト
ディスプレイ	640×200dot CGA LCD 【アクティブエリア : 174×66mm】
キーボード	Qwerty 78キー・キーボード
I/Oポート	シリアルインターフェース×1 (COM1) パラレルインターフェース×1 (LPT1)
本体重量	765g (乾電池を含む)
バッテリー	メインバッテリー 単三Ni-Cd充電電池 3本 (持続時間 : 約6時間) サブバッテリー 無し
PCMCIA	PCMCIA 2.0 Type II 1スロット実装
HDD	HP製1.3インチ40MバイトHDD Kittyhawk内蔵
サイズ	231mm (W) ×122mm (D) ×36mm (H)
内蔵ソフトウェア	MS-DOS Ver 5.0 ROM Version
ACアダプタ	本体に付属 (DC 6V)

液晶画面は一般的なCGAである。有効エリアは174×66mmあり、コントラストも比較的良く見やすい液晶と言えるであろう。なお、濃度調整は本体右サイドのボリュームで行う。これも余談だが、液晶の濃度調整は、やはりボリュームツマミで行うのがベストだ。バームトップ機の場合、アプリケーションソフトやファンクションキー入力で液晶濃度を調整するマシンが多いが、素早い濃度調整を行うにはやはりボリューム方式が一番だと、筆者は個人的に思っている (008)。

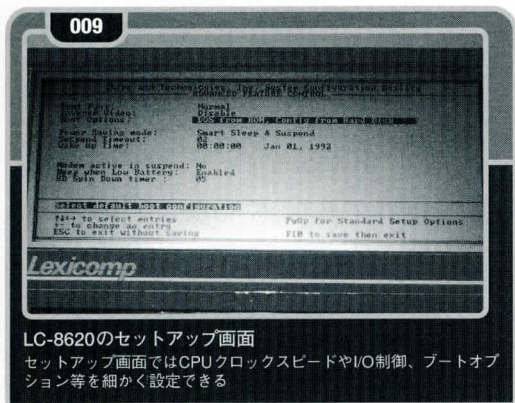
搭載OSはMS-DOS Ver5.0をROMで内蔵している。ここまで仕的にトンガったマシンなのだから、せめてDR-DOSでも搭載してほしかったと思うのは、筆者だけであろうか? (筆者だけであろう、きっと…… ^^ ; ;)

表1にLC-8620の製品仕様を示す。

🌀電源を入れてみよう!

さて、ACアダプタをつないで充電も完了したところ、LC-8620を起動させてみよう。電源を投入すると、お約束の内蔵メモリチェックが行われる。このマシンは特殊なアーキテクチャを採用しているせいか、コンベンショナルメモリ空間も広い、って言うか、普通MS-DOSのコンベンショナルメモリ空間って640Kバイトのハズだけど、このマシンでは704Kバイトまで使用でき、何となく徳した気分になってしまう。

次に、内蔵HDDを有効にするか否かを尋ねてくる。もし大容量のPCMCIAフラッシュメモリが搭載されておりHDDが不要である場合には、この段階でHDDを切り離しておく、メシを食うデバイスが無くなるのでバッテリーの節約になるというわけである。最後に、セットアップ画面に入るかどうかを聞いてくる。



LC-8620のセットアップ画面

セットアップ画面ではCPUクロックスピードやI/O制御、ブートオプション等を細かく設定できる

Press <F1> to continue , <F2> to Setup...

セットアップ画面は2画面構成となっており、シリアル・パラレルポートの制御、CPU駆動周波数の切り替え、LCD画面の白黒反転表示の設定等が行える。特徴的なところはブート時のシーケンスを細かく制御できる点で、下記5種類ものブート方法が選択可能だ(009)。

- DOS from ROM , Config from Hard Disk
- DOS and Config from PCMCIA Card
- DOS and Config from ROM Disk
- DOS and Config from Hard Disk
- DOS from ROM , Config from PCMCIA Card

LC-8620で日本語環境を構築するためには、DOSをROMから起動させ、config.sysを内蔵HDDから読み込み設定(DOS from ROM , Config from Hard Disk)にすれば良い。この状態で、日本語環境をCドライブである内蔵HDDの中に格納し、Cドライブのルートディレクトリ上のconfig.sysファイルでドライバの登録を行えば、日本語化が可能となる。

毎度のことながら、お約束の日本語化

さて、お約束の日本語化であるが、謎ば~機の日本語化方法についてはいつも取り上げていることもあるので、細かい内容は割愛し、要点だけ述べることにしよう。まず、必要となるファイルを40MバイトのHDDに格納し、config.sysとautoexec.batを修正すればよい。

①必要なファイルの準備

フォントファイル

おなじみ「オカヤシステム」製日本語フォントファイルを使用した。

LXHN16X.FNT	16ドット半角フォント
LXZN16X.FNT	16ドット全角フォント
LXHN11X.FNT	11ドット半角フォント
LXZN11X.FNT	11ドット全角フォント
LXHN08X.FNT	8ドット半角フォント
LXZN08X.FNT	8ドット全角フォント

日本語表示用ドライバファイル

CGA用ディスプレイマネージャとフォントマネージャも、毎度おなじみのものを使用した。

FONTMAN.EXE	フォントマネージャ
FONTMAN.INI	フォントマネージャの環境設定ファイル
YADC.EXE	CGA用ディスプレイマネージャ
YADC.INI	CGA用ディスプレイマネージャの環境設定ファイル
PANSI.SYS	ANSIドライバ互換のドライバ

その他必要なファイル

FEPを組み込む際に必要となるファイルを用意する。LC-8620は特殊なアーキテクチャーを採用しているため、この部分については若干補足説明をしておこう。

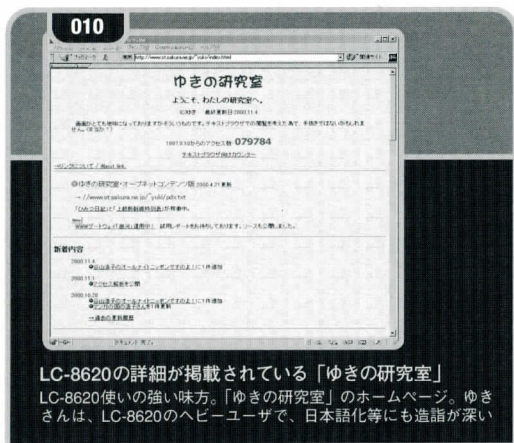
KKCFUNC.SYS ■ ■ KKCFUNC.SYSは、MS-DOS Ver5.0付属のものを使用する。これに相当するフリーのソフトウェアは残念ながら見当たらないため、入手できなかった場合には、後述のSETVER3.SYSを使用すればよい。

SETVER3.SYS ■ ■ KKCFUNC.SYSの代わりに使用するフリーソフト。FEPとしてWX2を使用する場合、SETVER3.SYSを組み込んで、MS-DOSのバージョンを3に化けさせてから、WX2を組み込むというヤヤコシイ手法を取る。理由であるが、WX2ではDOSのバージョンが3の場合、KKCFUNC.SYSを組み込まなくてもFEPを動作させることができるからだ。

LC86EX.SYS ■ ■ LC86EX.SYSは、LC-8620シリーズの基本機能を拡張し、かつ数々の不具合を修正するためのフリーソフト。また、LC-8620上でWX2を使用する場合に必要となってくる。このフリーソフトの作者は「ゆき」さん。同氏はLC8620のヘビーユーズであり、LC-8620を快適に使用するためのソフトも作成されている。ホームページも開設しておられ、URLは下記の通り。

<http://www.st.sakura.ne.jp/yuki/index.html> (010)





LC-8620の詳細が掲載されている「ゆきの研究室」
LC-8620使いの強い味方。「ゆきの研究室」のホームページ。ゆき
さんは、LC-8620のヘビーユーザーで、日本語化等にも造詣が深い

このサイトでは、「初級編」「中級編」「上級編」という形でLC-8620の使い方を解説しており、非常にわかりやすい。まさに、このサイトを見ればLC-8620の全てがわかるので、興味のある方は必見だ。

さて、前述したようにLC-8620はCPUにF8680Aを使用している。F8680AはもともとChips and TechnologiesのF8680CPUをマイナーチェンジしたものである。F8680は、80186命令や80286命令を実行することができなかったのだが、F8680Aになってからは特殊レジスタを操作することにより、これらの命令も処理できるようになった。しかし、LC-8620では、デフォルトではこれらのレジスタ操作ができない仕様となっており、結果的に80186命令を実行できず、WX2等の186命令を使用しているソフトウェアが動かなかったのである。しかし、LC86EXを組み込めば、上記特殊レジスタ操作により、80186命令の実行が可能になるというワケだ。LC86EX.SYSはこの他にも様々な拡張機能がある。下記に機能一覧を示す。

- CTRLキーの動作不具合の解消
- F8680Aの186命令許可ビットをセットする
- RAMアクセスタイミングの変更 (オプション機能)
- Ctrl+Alt+Delでリセット時の処理
- セグメントC000~CFFFhをUMBにする (オプション機能)
- Ctrl+SPACEをAlt+に交換する (オプション機能)

② ファイルの格納

必要なファイルがそろったら、LC-8620のHDDへファイルを格納する。筆者のディレクトリ構成を下記に示すので、参考にしてほしい。

```
C:\
├── FONT ─── LXHN16X.FNT
│           LXZN16X.FNT
│           LXHN11X.FNT
│           LXZN11X.FNT
│           LXHN08X.FNT
│           LXZN08X.FNT
├── DOSC ─── FONTMAN.EXE
│           FONTMAN.INI
│           YADC.EXE
│           YADC.INI
│           ANSI.SYS (無い場合は、PANSI.SYS)
│           KKCFUNC.SYS (無い場合は、SETVER3.SYS)
│           LC86EX.SYS
```

③ 環境設定ファイルの作成

• fontman.iniファイル

日本語化を行うソフトウェアの環境設定ファイルを編集する。編集を行うファイルは、DOSCディレクトリに格納したfontman.iniファイルで、下記のように修正を行う。

• FONTMAN.INI

```
;  
; fontx2フォント定義  
;  
[fontx2]  
c:%font%\xhn16x.fnt  
c:%font%\xzn16x.fnt  
c:%font%\xhn11x.fnt  
c:%font%\xzn11x.fnt  
c:%font%\xhn08x.fnt  
c:%font%\xzn08x.fnt
```

• config.sysファイル

Cドライブ (内蔵HDDドライブ) のルートディレクトリに格納したconfig.sysファイルを編集する。筆者のマシンの場合、下記のようにになっているので、参考にしてほしい。

```
files=40  
buffers=40  
  
device=d:\pccem.sys nclear=on size=960  
device=d:\ramdrive.sys 640 512 20 /a  
device=d:\sdpdrv.sys  
device=d:\sstordrv.sys /maxmount=2 /noauto  
  
shell=command.com /p /e:512  
  
rem interlnk must be last because it reserves drive letters  
rem device=d:\interlnk.exe /noscan /drives:6 /com1 /lpt:1  
  
device=c:\doscf\lc86ex.sys  
  
device=c:\doscf\fontman.exe -d -fc:\doscf\fontman.ini
```

```
device=c:\%doscc%\yadc.exe -b+ -bd -v70 -h11
```

```
device=c:\%doscc%\ykkfunc.sys  
device=c:\%doscc%\ansi.sys
```

・ autoexec.batファイル

Cドライブのルートディレクトリに格納されているautoexec.batについては、パスを追加するくらいで特に変更する必要は無い。参考までに筆者マシンのautoexec.batファイルの内容を、下記に示す。

```
@echo off  
Prompt $p$g  
set comspec=c:\command.com  
set path=d:\%;c:\%;c:\vz;c:\%bin;c:\%doscc%;c:\%bin;  
absetup b=on t=on a=2 s=on p=on  
emdrv.exe  
absmouse  
c:
```

以上の処理を行ってマシンをリポートすれば、DOS/C化が行われ日本語表示が可能となるはずだ。なお、上記設定ではマシン起動時に11ドットフォントで表示されるように設定されている。LC-8620の液晶サイズとしては、文字の大きさと1画面に表示される行数とのバランスから、11ドットフォントが最も適しているように思われる。(011)

④日本語FEPの導入

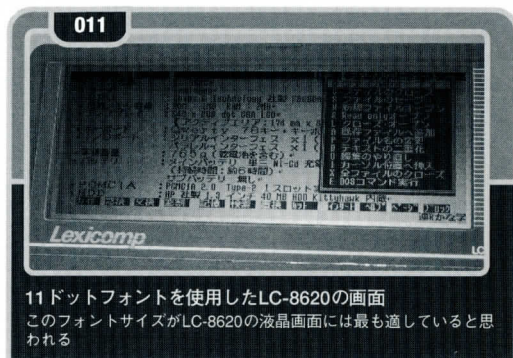
さて、日本語が表示されるようになったところで、FEPを組み込んでみよう。筆者が確認したLC-8620上で動作するFEPは、下記の通り。

- ・ エー・アイ・ソフト **WX2+** (Ver2.7 IBM PC/AT DOS版)
- ・ サムシンググッド **Katana (刀)** Ver4.0 DOS/V版
※ DOS/C対応のバッチを当てる必要がある

FEPの導入に伴うコンベンショナルメモリの圧迫を防止するには、「WX2+」よりも「刀」を使用した方が若干有利である。

WX2+を使用する場合

WX2+は、専用のインストーラを使用しないと導入することができないが、インストーラはCGAマシンでは動作しない。従って、VGA以上が表示できる他のマシン上にインストールした後、LC-8620内蔵のHDDに必要なファイルをコピーする方法を取る。CドライブのWX2ディレクトリにWX2ソフトを格納した場合、config.sys上で設定例を下記に示す。



11ドットフォントを使用したLC-8620の画面
このフォントサイズがLC-8620の液晶画面には最も適していると思われる

```
device=c:\%wx2%\wxk.sys /A2 /SBS /SD5  
device=c:\%wx2%\wx2a8.sys /A2 /dc:\%wx2%\wx2.dic
```

刀を使用する場合

サムシンググッドが開発した日本語FEP「刀」は、Newオーロラエースという商標の日本語ワープロソフトにバンドルされていた。オーロラエースという名称は、DOSの時代からパソコンを使っている方にとっては懐かしい響きであろう。さてこのワープロソフトであるが、当然DOSベースの古代のソフトウェアなので、今となっては入手は困難なものとなってしまっている。もしLC-8620を持っていて、かつNewオーロラエースが押し入れの中か、なんかに転がっているような人がいたら（そんな人、一体何人いるんだよ！）、是非試してみしてほしい。

ところで、刀はWX2+よりもメインメモリの使用量が少ないというメリットがある。しかし、このソフトウェアは、そのままではDOS/C環境下で使用できないため、システムソフトウェアにバッチを当てなくてはならない。

刀をDOS/C環境下で動作させるためドライバ及びバッチファイルは、@niftyの下記ライブラリに登録されている。

- ・ Katana (刀) Ver 4.0 Rel 1.06 <DOS/C版> (ファイル差分)

Hewlett-Packard PC users' Forum (FHPPC)

データライブラリ11番【ソフト】

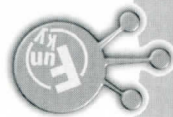
日本語化プログラム 47番 KTN4C106.LZH

KTN4C106.LZH Katana(刀) Ver.4.0 Rel.1.06

<https://iw.nifty.com/iw/nifty/fhppc/lib/11/47.html>

制作者：アスキーサムシンググッド

上記で入手したファイルを、作業用マシンの適当なディレクトリ中に解凍する。解凍を行うと、下記ファイル



が生成される。

・ KTN4C.SYS ・ KTN4UP.COM ・ README.TXT

商品版New オーロラエースにバンドルされてくる刀 Ver.4のシステムファイル「KTN4.SYS」と、上記から入手した「KTN4C.SYS」とを同一ディレクトリに置き、「KTN4UP.COM」を実行する。これで、KTN4.SYSにDOS/C対応のバッチが当たり、LC-8620でも使用できるようになる。

CドライブのKTN4ディレクトリに刀関連のソフトを格納した場合の、config.sys上での設定例を、下記に示す。

```
device=c:\%ktn4%ktn4.sys /F=C:\%KTN4%\KTN4.CFG
device=c:\%ktn4%ktn4c.sys /F=C:\%KTN4%\KTN4.CFG
```

カードモデムを使う

次に、LC-8620でカードモデムを使用する方法について述べておこう。LC-8620にはモデムを内蔵した機種も存在するが、残念なことに筆者が購入したマシンには、モデムが内蔵されていない。そこで、PCMCIAカードスロットにカードモデムを挿入して使用する場合について述べる。今回筆者が用いたモデムは、Megahertzの超古いモデム、XJ-1144である（だって、これしか見当たらなかったんだもん!）。モデムカードを使用する際に最初に行っておくことは、シリアルポートをONにすることだ。LC-8620の起動時にF2キーを押してセットアップ画面に入り、Serial Port :の項目をEnableにしておこう。

LC-8620では標準でPCMCIAカードモデムをサポートしていないので、カードモデムを入れただけでは認識されない。そのため、フリーソフトのモデムカードイネーブラ、MCARD.EXEを使用する。MCARD.EXEはモデムカードのポイントイネーブラであり、上述したLC86EX.SYSの作者である「ゆき」さん制作のソフトウェアである。ダウンロード先のURLは下記の通り。

・ MCARD.EXE

http://www.page.sannet.ne.jp/yk_kawa/palmtop/shokyu.html#5

MCARD123.LZHを解凍して得られるファイル、MCARD.EXEをパスの通ったディレクトリにコピーする。使用方法は、まず、モデムカードをLC-8620のPCMCIAカードスロットに挿入し、DOSのコマンドプロンプトか

らMCARD ONを実行するだけでよい。モデムカードがイネーブルになると、COM3、IRQ7として認識される。通信が終了したら、MCARD OFFを実行し、モデムカードを抜く。モデムカードを使用している間は、バッテリーの消耗が激しくなるので注意が必要だ。

さいごに

LC-8620の操作性だが、CPUにF8680Aを採用した効果は絶大で、DOSベースのアプリであればサクサクとストレスを感じさせることなく使うことができる。FEPのかな漢字変換も、待たされるようなことは無い。テキストエディタでメモを取るには、全く問題無く、これは大きなメリットと言えるであろう。40MバイトというHDD容量も、DOS/Cのアプリケーションソフトを格納するには充分な大きさで、特に不足は感じられない。ただし、節電モードで使用すると、一定時間アクセスが無い場合にはHDDの回転が停止する。従ってHDDが再度回転を開始するまで若干のタイムラグがある。この点だけは慣れないとちょっと違和感がある。

日本では知名度も低く、発売当時の価格も確か9万円以上（もっとだったかもしれない……）したこともあり、LC-8620の残存台数は極めて少ないものと思われる。

しかし去年の夏に、筆者の悪友であり、流しの修理屋であり、プロの整備士であり、マイナーな物とカルトな物に異常な執着を示すパソコンマニアであり、1970年代の歌謡曲に異様に造詣が深いオークションマニアであるところのRandy氏と秋葉原ジャンク屋巡りをした際に、芳林公園の近くに位置し、店内にジャンクとなった物故パソコンを天井まで積み上げているという、まさにジャンク屋の王道を行くような某店舗（どこか、わかるかな？ 勘の良い廃人さんにはわかると思うが……）の、10年間くらい整理しておらず混沌の極みと化してしまったショーウィンドーの堆積物の一番下に埋もれていたLC-8620を発見した時は、さすがに驚いたものである。

因みに、その時発見したLC-8620であるが、Randy氏が速攻ゲットしたことは、言うまでもない。文化財保護の観点から、1台でも多くのLC-8620が現役で残ってほしいものだ。